

ふつうなら，満足

フィードバックされた成績が心理テストの妥当性評価に与える影響

大橋 恵

Satisfied If I am Evaluated as Average:

The Effect of Feed-backed Performance on Validity Evaluation of a Test

Megumi M. Ohashi

Abstract

This experiment was conducted in order to examine if being average has positive connotation for Japanese. Japanese adults evaluated validity and reliability of a developing psychology test that measures social sensitivity or cognitive structuring ability, after receiving bogus feedback about their performance on the tests (high, average, or low). They also evaluated to what extent they were convinced about their results. The participants were satisfied with being average as well as when they were high performer, which would reflect Japanese value placed on being average. As for validity and reliability of the tests, the results were complicated. As for the social sensitivity test, those who received high feedback and average feedback evaluated the test more valid than those who were evaluated as low. As for the cognitive structuring test, those who received average feedback evaluated the test most valid. This pattern implies they believe that they are above average on social sensitivity but about average on cognitive structuring. We can say that Japanese self-concept is not necessarily negative, but positive about some abilities.

キーワード: ふつう，自己評価，日本人，自己高揚傾向，フィードバック

問題

欧米での自己認知に関する研究では，自分を肯定的にみるさまざまな認知バイアス（自己高揚バイアス（self-serving bias）と呼ばれる）が報告されている。多数ある自己高揚バイアスのうちの一つは「平均以上効果（above average effect）」である。これは，たとえばある大学の学生たちに「君のリーダーシップ能力は，この大学の学生の中で上から何%くらいだと思うか」と尋ねると，20%や30%のように小さい数字を答える学生が，80%や90%のように大きな数字を答える学生よりも多く，その平均をとると50%よりも小さな数になる現象である。このように，人々に自分の能力について自分の所属集団内での相対的な地位を尋ねると，その回答の平均が理論上の平均（つまり50%）を超える現象を平均以上効果という。この他に，原因推測の自己高揚バイアスも知られる。これは成功した場合に原因は自分の能力や努力が原因だととらえ，失敗した場合には運や課題の困難さが原因だと考える傾向をいう。こ

れらは自分を過度に望ましくとらえていることを意味し，自己イメージの維持・高揚に役立ち，さらには精神的な健康を保つためにも良いと議論されている（e.g., Taylor & Brown, 1988）

このような自己高揚バイアスは，欧米では人の心理の基礎的な性質だとされてきたが，日本をはじめとするアジアでは小さいあるいは見られないことが，近年明らかになってきた（for reviews, Heine, Lehman, Markus & Kitayama, 1999; Markus & Kitayama, 1991; Matsumoto, 2001）。たとえば，日本においても平均以上効果は認められるが，そのサイズはえてして欧米の報告よりも小さい（e.g., 伊藤, 1999; 外山・桜井, 2001）。また，原因推測の自己高揚バイアスは，日本では見られにくく，逆に自己卑下が見られることが多い（e.g., 北山・高木・松本, 1997）。すなわち，日本人をはじめとするアジア人は必ずしも肯定的な自己イメージを持っていないようなのだ。

このような状況から，心は根本的に社会的な産物

であり，心理学の理論や方法を考えるためには文化的背景を考慮することが大切であることが再認識されつつある。文化的な背景といってもさまざまな面が考えられるが（Markus & Kitayama, 1991; Nisbett, 2003; Triandis, 1989），日本人が欧米人と最も異なるのは，自分のどの面を改善したいと思うかではないだろうか。つまり，欧米人が自分の得意な面を伸ばすように努力するのに対し，日本人は自分が不得意な面の改善を目指す（北山・唐沢，1995；Heine et al., 1999）。欧米人のやりかたは人を個性化に導くのにに対し，日本人のやりかたは人の平均化・「ふつう」化を導くだろう。この考えは，日本文化論などでの指摘，日本人が中庸を重んじ，他の人と同じであることに価値を置くこと（e.g., Markus & Kitayama, 1991）と一致する。また，北アメリカ人が良いことがあるかどうかには焦点を当てて考える傾向があるのに対し，東アジア人は制御焦点が優位であり，悪いことがあるかどうかには焦点を当てがちであること（Elliot, Chirkov, Kim & Sheldon, 2001；Lee, Aaker, & Gardner, 2000）もこの説を支持する。

本研究の目的 1 自己認知

本研究は，以下の二つの点を明らかにするために行われた。まず，日本人は自分を「優秀」というよりも「ふつう」だと認知するのかを確認することである。自分についての自己報告を測定した比較文化研究において，日本人は自分をユニークではないととらえる傾向が示されている。Oyserman, Coon, & Kimmelmeier の研究（2002）は，さまざまな文化において集団主義・個人主義という価値観がどの程度保持されているかを実証するために行われたが，自己報告式の調査を用いた限りでは，アメリカ人と日本人との最大の違いは自分をユニークと感じる程度であった。また，ランダムサンプリングを行った社会調査において，日本人成人の約 8 割が自分をふつうだと思うと回答している（大橋・針

原，2000）。さらに，日本人に自分の将来について予想させたところ，過度に「ふつう」だとみる頑健なバイアスの存在が報告されている（Ohashi & Yamaguchi, 2004）。

これらのことから日本人は自分を「ふつう」だと見ていることが伺えるが，どれも研究アプローチに限界がある。初めの 2 者は自己報告法を使っているため，回答は本当の考えではなく世間の価値観に合わせた建前である可能性が否めない。一方，最後の研究は将来予測という特定分野に限定されており，「自己」全体を見ているわけではない。そこで，本研究では，別の手法を用いて，日本人は自分を「ふつう」だと認知するのかを確認することにした。

本研究の目的 2 ふつうの望ましさ

先述したように，欧米の研究では，人が自分を過度に優秀であると認知するのは，優秀であることが望ましいことで，本人たちの精神的健康を促進するからであると説明されている（e.g., Taylor & Brown, 1988）。しかしながら，自己高揚バイアスの小さい日本において精神的健康状態が良くないというデータはない。文化心理学においては，相互依存的な自己観を持つ日本人には自分を望ましい存在だと見たいという動機づけそのものが低いという説も，表出のされ方が異なるだけで欧米人同様日本人も自分を望ましいとみなす動機づけは高いという説もあり，いまだ結論が出ていない。著者は，無意識の指標を使った場合自己高揚バイアスが欧米人と同程度見られる（山口・村上，2000；Yamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, Shiomura, Kobayashi, Cai, & Krendl, 2007）ことや，平均以上効果が見られる特性と見られない特性がある（Harihara, Yamaguchi, & Niiya, 2000; Sedikides, Gaertner, & Toguchi, 2003）ことから，後者の立場に立つ。そして，日本人は自分を「ふつう」だと認知しているとすれば，その理由は「ふつう」が望ま

しいことだからであろうと考えた。

このような疑問から、日本人にとって、「ふつうであること」が好ましい状態なのかも本研究であわせて検討することにした。「ふつう」を辞書で引けば、「良くはない」と「悪くはない」の二通りの意味が含まれる。しかしながら、日本人にとっては「悪くはない」の意味のほうが強く感じられるのではないかと考えた。なぜなら、北アメリカ人が良いことがあるかどうかには焦点を当てて考える傾向があるのに対し、東アジア人は制御焦点が優位であり、悪いことがあるかどうかには焦点を当てがちであるからだ (Elliot, Chirkov, Kim & Sheldon, 2001; Lee, Aaker, & Gardner, 2000)。実際に、良い点があることよりも悪い点がないことのほうが日本人の精神的健康に影響が大きいこと (北山・唐沢, 1995) や、他者からの期待や基準を満たせないことに対して日本人は特に敏感であること (Unemori, Omoregie & Markus, 2004) が示されている。しかしこれらは直接的なデータではない。また、「ふつうの人」と言われて思い浮かべる人物は、「悪い意味でふつうの人」よりも「良い意味でふつうの人」に近いというデータ (大橋・山口, 2005) から、人を形容する際の「ふつう」は好ましくとらえられていると伺える。しかしながら、この研究は他の人が「ふつう」である状態について扱っているため、自分が「ふつう」である状態については当てはまらない可能性がある。したがって、自分が「ふつう」であることが日本人にとって望ましいのかどうか、きちんと検討する必要があるだろう。

テストの妥当性評価というパラダイム

上記二つの目的を検討するため、本研究では、開発中と称したテストの成績をフィードバックし、フィードバックされた成績 (良い・悪い・平均的) がそのパーソナリティテストの妥当性評価および結果満足度に与える影響を実験的に検討するという実

験方法を採用した。欧米では、そのテストで高い成績を取ったとフィードバックされた実験参加者のほうが、低い成績を取ったとフィードバックされた参加者よりも開発中のテストの妥当性を高く評価することが、繰り返し報告されている (Pyszczynski, Greenberg, & Holt, 1985; Wyer & Frey, 1983)。これは、一般に自分の持っている予期に合致した情報ほど説得力があり、受け入れられやすい (e.g., Kunda, 1990) という事実から考えるに、肯定的な自己イメージを持っていることがその背景にあると考えられる。つまり、自己高揚バイアスの一つであると解釈される。

したがって、もし自分を「ふつう」だとみなしていれば、平均的な成績をフィードバックされたときにそのテストの妥当性を最も高く評価すると予測できる。一方、テスト成績への満足度は、フィードバックされた成績の高い条件・平均的な条件で、低い条件よりも高いと予測した。これは、日本人は優秀と同じくらい「ふつうさ」に価値を置いていると考えたからである。

類似のことを検討した研究が既にあるが (佐野・黒石, 2007; 高田, 2006)、条件を変えて追試することによりさらに詳細に検討する。高田 (2006) の研究では、認知スタイル・テストのフィードバックされた成績を操作し、テストの正確性、結果満足度、感情状態などへの影響を測定した。その結果、高成績・平均的成績条件で、低成績条件よりも、テストは正確であると判断され、参加者たちは結果に満足し、肯定的な感情状態にあった。この研究は、中程度の成績が自己評価の維持・高揚をもたらす可能性を実験的に示した点で意義深い。佐野・黒石 (2007) は、連想力テストのフィードバックされた成績を操作し、感情状態や状態自尊心への影響を測定した。その結果、高成績条件、平均的成績条件、低成績条件の順に肯定的感情が強く、低成績条件で、

高成績・平均的成績条件よりも否定的感情が強かったと報告している。

しかし，これらの先行研究では2点未検討のことがある。1点目は，成績フィードバックの方法である。一般に成績のようなものは正規分布に近い分布をすると考えられる。正規分布を仮定すれば，平均的な成績とはすなわち沢山の人がとっている得点であり，高い成績や低い成績とはすなわちあまりとる人がいない得点となる可能性がある。そうなること，確率的に妥当性が高くて当たり前である。今回はその成績をとる確率を統制するために，点数の範囲を図示することにした。

2点目は，自己評価と一口にいても，どのような面を扱うかによって高低が異なる可能性がある点である。対人認知研究においては，優しい，思いやりがある，気がきくなどの対人的特性と，頭が良い，物知りであるなどの認知的特性は分けて考えられることが多い（e.g., Peeters, 1983）。自己評価についてもこの区別は有効であると考えられ，対人関連的な特性や能力は相互協調的自己在らすべきものとして高い価値が置かれるため，認知的な特性や能力よりも自己評価が高い可能性がある（e.g., Markus & Kitayama, 1991）。実際に，自己卑下的であると言われる日本人でも，対人的な特性においては高い自己評価を行うことがあることが報告されている（Harihara, Yamaguchi, & Niiya, 2000; Sedikides, Gaertner, & Toguchi, 2003；外山・桜井，2001）。ただし，これらの研究は平均以上効果を指標としているため，平均的な他者のたとえば優しさについて想像が難しいために適当に低い人を引き合いに出すなど，測定法の難しさがあることは否定できない（Kruger, 1999；工藤，2004）。

そこで，本研究では，フィードバックされた成績の影響を調べる際に，対人的な能力と関連したテストと認知的能力と関連したテストの双方を用いて，

反応を比較することにした。

方法

概要

本研究では，フィードバックされた成績（良い・悪い・平均的）およびテストの種類が，そのパーソナリティテストの妥当性評価および結果満足度に及ぼす影響を調べた。フィードバックされた成績は被験者間要因で操作された。また，テストの種類は被験者内要因であり，実施順序はカウンターバランスをとった。実施順序の有意な影響は見られなかったため，実施順序は込にした結果のみを報告する。

実験参加者は，研究の目的は，最近開発中の心理テストのモニターとなり評価を行うことだと告げられた。彼らは，コンピューターを用いて開発中の社会的感受性テストおよび認知統合テストを体験し，偽の成績をフィードバックされた。その後，テストの正確さ・妥当性・結果満足度などを評価した。事後質問紙に対する回答やデブリーフィングを含めて，実験は1時間弱を要した。実験は，通信制大学構内のコンピューター室で行われた。

実験参加者

通信制大学にて心理学系のスクーリングを受講中の学生73名（男性11名，女性62名，平均年齢42.4歳，標準偏差10.5歳）が，授業の課題として実験に参加した。各条件の人数は23から25名だった。

手続き

1. 実験参加者は，15名から25名の集団で心理学関係のスクーリングを受講していた。その授業の課題として，実験に参加することになった。実験参加者たちは，実験の目的は，開発中の心理テスト「社会的感受性テスト」および「認知統合性テスト」のモニターとなり，評価を行うことであると告げられた。具体的には以下のように教示した。

「今日の目的は、とある心理テストについての一般の人々の評価を得ることです。この手の評価はふたつの情報源によっています。そのテストに関する個人的な経験と、テストが何を測定していて何を予測できるかについて知識を持った他者の意見です。私達は、この二種類のタイプ両方に基づいた反応に興味があります。

はじめに、テストの性質を理解し自分なりの意見を持ってもらうために、心理テストを受けてください。その後、あなた自身のこれらのテストに対するご意見を伺います。」

社会的感受性とは、他の人の気持ちを察する能力であり、認知統合性とは、様々なことがらをまとめて考えることのできる能力であると説明した。

2. テストの実施

実験参加者は、コンピューターの指示に従いながら社会的感受性テストおよび認知統合性テストを受けた。テストの種類についてはカウンターバランスを取ったため、半数の実験参加者は先に社会的感受性テストを受け、残りの実験参加者は先に認知統合性テストを受けた。

社会的感受性テストは、刺激語と一般的に人が結

びつける言葉を4つの選択肢の中から選ぶという形式で、計50問あった。たとえば、「牧場」という刺激語の隣に「草、空、牛、鳥」のような4つの選択肢が並んでいた。Wyer & Frey (1983) で用いられている英語版を参考に著者が作成した。その際、項目の内容が複数の選択肢が同程度連想されるように注意した。それは、参加者が自分が正答したかどうか確信を持ちにくいようにするためである。

認知統合性テストは、画面中央に表示される抽象的な絵を見て、素早く選択肢の中から適当な言葉を選ぶという形式で、計10問あった。こちらも、参加者が自分が正答したかどうか確信を持ちにくいような選択肢を用いるように注意した。

記憶・計算・素早さを強調すると学業的なフィードバックを学生時代までに大量に受けてきた人たちには効きにくいと考え、今まであまり聞いたことがないであろう特性である、認知統合性を用いた。このテストは著者が自作したが、妥当性の評価の平均値には統計的に有意な差は認められず($t(72) = 1.09, ns$)、社会的感受性テストと比べて妥当性に劣るということはないと言えよう。

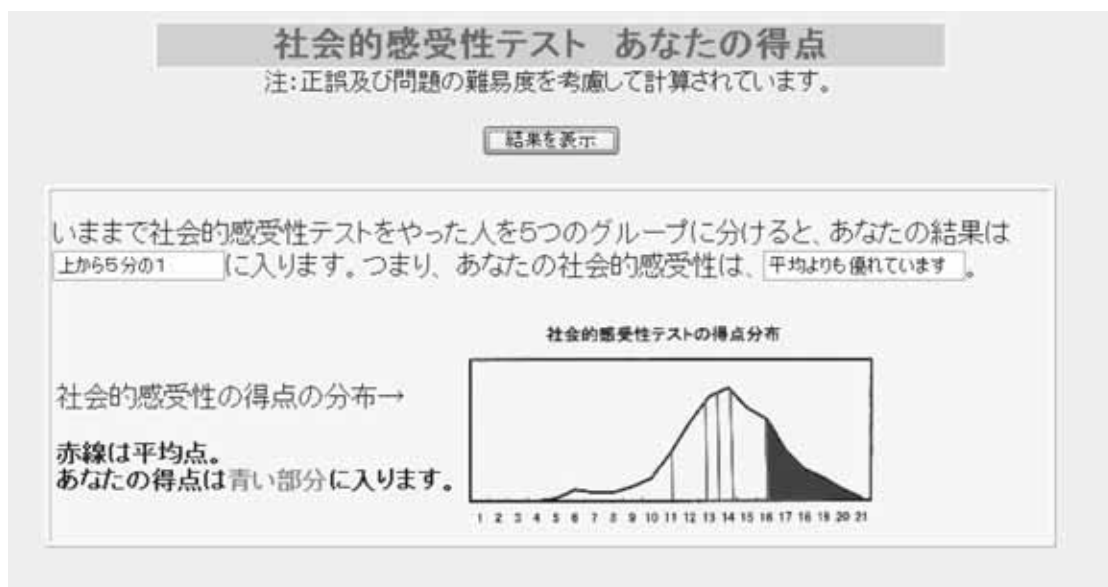


図1 フィードバック画面の例

3. 成績のフィードバック（独立変数の操作）

各テストを受け終わると，その成績がフィードバックされた。実際にはこの操作はランダムであった。

今までにこのテストを受けた人の中での実験参加者の成績の位置を「高い」「平均的」または「低い」とフィードバックした。「成績が高い」と言われても，どのくらい高いのかという程度の解釈には個人差がある。また，正規分布に近い分布の場合，平均的な成績の人の数は，極端に良い・悪い成績の人の数よりも多くなる。これらの問題を回避するため，成績のフィードバックは「上位（下位・中位）5分の1に入った」という表現を用い，説明のため，得点の分布図および平均点を表示した（図1）。

4. 従属変数の測定

各テストの採点基準について簡単な説明を読んだ後，モニターとしての意見を聞くという名目で，テストの妥当性を評価した。

従属変数であるテストの妥当性評価は，以下の4項目（各7点尺度）で測定した。「テストは社会的感受性を正しく反映していると思うか」，「良いテストだと思うか」，「別の方法で測定したら今回と似たような結果になると思うか」，「この社会的感受性テスト（または，認知統合性テスト）は，自分の本当の社会的感受性（または，認知統合能力）をどのくらい正確に反映していると思うか」。また，自分の得点への納得度（5点尺度）・満足度・認知的統合力または社会的感受性の重要性（各8点尺度）も併

せて測定した。全て得点が高いほど肯定的な回答であることを示すよう得点化した。

5. 実験終了

実験参加者は，実験終了を告げられ，事後質問紙に回答した。その後，真の目的が説明された。

結果

テストの妥当性評価

妥当性評価の4項目の内部相関はどちらのテストについても高かったため，分析には4項目の平均値を使用した（ $r = .87, .91$ ）。

テストごとに分散分析を行った。その結果，社会的感受性テストについて，平均成績条件および高成績条件において，低成績条件よりも，テストの妥当性評価は高かった（図2， $F(2,70) = 6.03, p < .01$ ）。認知統合性テストについても条件間に差は見られたが（図2， $F(2,70) = 4.65, p < .02$ ），そのパターンは異なっていた。すなわち，平均成績条件では高成績条件・低成績条件よりも有意に妥当性評価が高かった。

結果満足度

結果満足度，納得度についても同様に，テストごとに分散分析を行った。その結果，どちらのテストについても，高成績条件・平均成績条件で，低成績条件よりも結果に納得し，満足していた（ $F_s(2,70) > 5, p_s < .01$ ）。これに加え，各テストで測定している能力の重要性については，フィードバックされた成績による差は見られなかった（ $F(2,70) < 1, ns$ ）。

表1 結果納得度，満足度などの平均値（標準偏差）

| | フィードバックされた成績 | | |
|-------|--------------|--------------|--------------|
| | 高い | 平均的 | 低い |
| 結果納得度 | 4.43a (1.59) | 4.14a (1.27) | 3.05b (1.50) |
| | 4.68a (1.52) | 5.14a (1.20) | 3.04b (1.20) |
| 結果満足度 | 4.61a (1.47) | 3.96a (1.32) | 2.95b (1.29) |
| | 4.77a (1.07) | 4.46a (0.78) | 2.47b (0.99) |
| 次元重要度 | 5.48a (1.28) | 5.04a (1.17) | 4.82a (1.40) |
| | 5.00a (1.49) | 4.91a (1.24) | 4.95a (1.50) |

上：社会的感受性、下：認知的統合性

これはすなわち、自分の成績が悪いからといって、その次元の重要性を下げることはなかったことを意味する。年齢を共変量に入れた分析も行ったが、年齢の有意な効果はどの分析においても認められなかった。

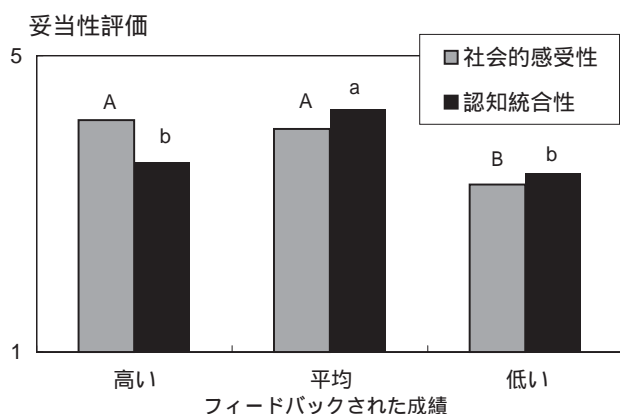


図2 フィードバックされた成績がテストの妥当性評価に与える影響

考 察

本研究では、フィードバックされた成績がどのようにそのテストの妥当性評価や結果満足度に影響するのかを検討した。まず、実験参加者が自分の社会的感受性・認知統合性をどの程度だと思っているかを間接的に調べた、テストの妥当性については、以下のような知見が得られた。すなわち、対人的な能力については、成績が高いとき及び平均的であるときに、低いときよりもそのテストの妥当性が高く評価された。一方、認知的な能力については、平均的な成績を受け取ったときに最も妥当性を高く評価していた。これは、社会的感受性能力において彼らは自分を平均より少し上で、認知統合性については平均的であると考えていることを示唆する。本研究は、自分の能力についての評価は、対人的・認知的という特性の種類に依存するということを、自己卑下や自己高揚が入りにくいと思われる手法を用いて改めて示した。特に強調したい点は、自己評価の次元の種類が重要であることである。

他方、両テスト共に、高い成績・平均的な成績をフィードバックされた群で、低い成績をフィードバックされた群よりも、結果の納得度および満足度が高かった。これは、「ふつう」という評価が高評価と同じくらい満足感を生むことを示す。換言すれば、実験参加者は、特に優れていなくても平均的な成績ならば満足しており、「平均より下でなければ満足」という価値観の存在が確認された。

以上をまとめれば、本研究は、「ふつう」であることが十分に満足感を生むことを示したと同時に、自己評価について検討する際にはどの次元においての評価であるのかが問題となることをも示した。

引用文献

- Elliot, A. J., Chirkov, V. I., Kim, Y., & Sheldon, K. M. (2001). A cross-cultural analysis of avoidance (relative to approach) personal goals. *Psychological Science*, 12, 505-510.
- Harihara, M., Yamaguchi, S., & Niiya, Y. (2000). Japanese self-effacement: low self-regards or self-presentation? Poster presented at *the 15th Congress of International Association for Cross-Cultural Psychology*, Pultusk, Poland.
- Heine, S. J., Lehman, D., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, 106, 766-794.
- 伊藤 忠弘 (1999). 社会的比較における自己高揚傾向：平均以上現象の検討 *心理学研究*, 70, 367-374.
- (Ito, T. (1999). Self-enhancement Tendency in Self and Other Evaluations--An Examination of 'Better-than-average Effect. *Japanese Journal of Psychology*, 70, 367- 374.)
- 北山 忍・唐沢 真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座. *実験社会心理学研究*, 35, 133-163.

- (Kitayama, S., & Karasawa, M. (1995). Self: A Cultural Psychological Perspective. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 133-163.)
- 北山 忍・高木 浩人・松本 寿弥 (1995). 成功と失敗の帰因；日本的自己の文化心理学．心理学評論，38，247-280.
- (Kitayama, S., Takagi, H., & Matsumoto, H.)
- Kruger, J. (1999). Lake wobegon be gone! The “below-average effect” and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 221-232.
- 工藤恵理子 (2004). 平均以上効果が示すものは何か：評価対象の獲得困難性の効果 社会心理学研究，19, 195-208.
- (Kudo, E. (2004). What is indicated by the above-average effect?: Effects of ease/ difficulty of acquiring traits or abilities to be judged ,*Research in Social Psychology*, 19, 195-208.)
- Kunda, Z. (1990). The case for motivated reasoning. *Psychological Bulletin*, 108, 480-498.
- Lee, A. Y., Aaker, J. L., & Gardner, W. L. (2000). The pleasure and pains of distinct self- construals: The role of interdependence in regulatory focus. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 1122-1134.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and self; Implication for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matsumoto, D. (2001). *The Handbook of Culture and Psychology*. Oxford University Press.
- Nisbett, R. E. (2003). *The Geography of Thought*. New York: The Free Press.
- 大橋 恵・針原素子 (2000). 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか？ 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集，20-21.
- (Ohashi, M. M., & Harihara, M.)
- Ohashi, M. M., & Yamaguchi, S. (2004). Super-Ordinary Bias in Japanese Self-Predictions of Future Life Events. *Asian Journal of Social Psychology*, 7, 169-185.
- 大橋 恵・山口 勸 (2005). 「ふつうさ」の固有文化心理学：人を形容する語としての「ふつう」の望ましさについて．実験社会心理学研究，44, 71-81.
- (Ohashi, M. M., & Yamaguchi, S. On desirability of “ordinary” as a person descriptor adjective: An approach from indigenous psychology. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 71-81.)
- Oyserman, D., Coon, H. M., & Kemmelmeier, M. (2002). Rethinking Individualism and Collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analyses. *Psychological Bulletin*, 128, 3-72.
- Peeters, G. (1983). Relational and informational patterns in social cognition. In W. Doise & S. Moscovici (Eds.), *Current issues in European Social Psychology*, 1, Cambridge: Cambridge University Press. pp.201-237.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Holt, K. (1985). Maintaining consistency between self-serving beliefs and available data: A bias in information evaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 179-190.
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2007). 「ふつう」を基準としたフィードバックが感情状態に及ぼす影響 日本心理学会第 71 回大会発表論文集，207.
- (Sano, Y., & Kuroishi, N.)
- Sedikides, C., Gaertner, L., & Toguchi, Y. (2003). Pancultural self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 60-79.

高田利武 (2006). 日本文化における自己卑下と自己高揚 -- 実験的検討 宮城学院女子大学研究論文集, 103, 113-129.

(Takata, T.)

Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: a social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.

外山美樹・桜井茂男 (2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72, 326-335.

(Toyama, M., & Sakurai, S.)

Triandis, H. C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, 96, 506-520.

Unemori, P., Omoregie, H., & Markus, H.R. (2004). Self-portraits: Possible selves in European-American, Chilean, Japanese and Japanese-American cultural contexts. *Self and Identity*, 3, 321-338.

Wyer, R. S. Jr. & Frey, D. (1983). The effects of feedback about self and others on the recall and judgement of feedback-relevant information. *Journal of Experimental Social Psychology*, 19, 540-559.

Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent Universality of Positive Implicit Self-Esteem. *Psychological Science*, 18, 498-500.

山口 勸・村上史朗 (2000). 日本人の肯定的な自己概念 : Implicit Association Test による検討 . 日本グループダイナミクス学会第 48 回大会発表論文集, 14-15.

(Yamaguchi, S., & Murakami, F.)